

ひょうご 水百景

No.3-1 加古川（加東市上滝野）

～多くの文人が訪れた播磨の名勝・闘龍灘～



写真-1 「闘龍すくえあから闘龍灘を撮影（令和7年11月）」

■ 奇岩怪石が加古川の奔流を阻む

闘龍灘（とうりゅうなだ）は、兵庫県下最大の流域面積を誇る一級河川・加古川の中流部、加東市上滝野に位置し、河床いっぱいに広がる奇岩・怪石が加古川の奔流を阻み、荒々しい水音と共に水しぶきをあげる様はまさに「名勝 闘龍灘」にふさわしい光景です。現在の水の流れは、写真-1の右岸寄りの流れと明治初期に開削された「掘割水路」の二つありますが、掘割水路が開削されるまでは流れが右岸部に集中して、落差は3m程度ですがかなりの迫力があつたと思われま

す。上流に架かる赤い桁の橋は、一般県道349号市場多井田線の闘龍橋です。昭和38（1963）年に架けられた3径間連続合成鉄桁橋で、橋長108m、幅員7mです。

■ 幕末の詩人・梁川星巖の七言絶句から「闘龍灘」と名づけられる

ここは、元は「双龍灘」と呼ばれていたそうですが、江戸時代後期の漢詩人・梁川星巖^{※1}（やながわ せいがん）がここに遊び、巨岩と巨岩の間を白波を立てて流れるさまを巨大な龍の躍動に喩えて七言絶句を詠んだことから「闘龍灘」と名付けられました。

※1 梁川星巖：寛政元（1789）年、美濃国安八郡曾根村（現・岐阜県大垣市曾根町）の郷土の子に生まれる。文化5（1808）年に山本北山の弟子となり、文政3（1820）年に女流漢詩人・紅蘭と結婚。紅蘭とともに諸国を巡り、多くの文人墨客を訪ね、数々の名所旧跡をまわる。江戸に戻ると神田お玉ヶ池のほとりに玉池吟社を設けた。梅田雲浜・頼山陽・吉田松陰・橋本左内らと交流があつたため安政5（1858）年から安政6（1859）年にかけて江戸幕府が行った弾圧「安政の大獄」の捕縛対象者となったが、その直前の安政5（1858）年コレラにより死亡。星巖の死に様は、詩人であることに因んで「死に（詩に）上手」と評された。



写真-2 梁川星巖

（「世界に一つ！加東遺産」から引用）

右の写真-3は、梁川星巖が詠んだ七言絶句の掛け軸で、加古川流域滝野歴史民俗資料館に展示していたものを撮影したものです。半分も解読できないので、その右に楷書体にして、その下に読み下しを付しています。

また、Wikipediaで「闘龍灘」を見ると、『闘龍灘』の名は、幕末にこの地を訪れた漢詩人の梁川星巖が、岩場を縫って流れ落ちる激流を見て、2匹の巨竜の躍動をイメージして七言絶句に『白波雲の如く立ち水声夥し』と詠んだことに由来する」と記していますが、この七言絶句に「白波雲の如く…」はありません。

このフレーズは、江戸時代後期の旅行ガイドブック『播州名所巡覧図絵』に描かれた闘龍灘の解説文に記されているものです。

「Wikipedia」は、筆者もよく使わせていただっていますが、時々間違いがあるので注意が必要です。

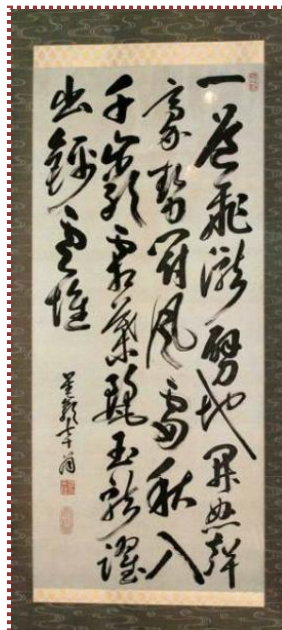


写真-3 七言絶句
(資料館展示物から引用)

一道飛瀧劈地開
努聲豪勢闘風雷
秋入千巖霜葉麗
玉龍躍出錦雲堆
星巖七十翁

(読み下し)
いどうの びゅうち せんちん こと
一道の飛瀧地を劈いて開く
とせいの ふうらい ふうせい たたか
努声豪勢にして風雷と闘う
あきせんが めい
秋千巖に入りて霜葉麗し
ぎよくの ゆうおう
玉龍躍り出でて錦雲堆し

七言絶句 読みくだし

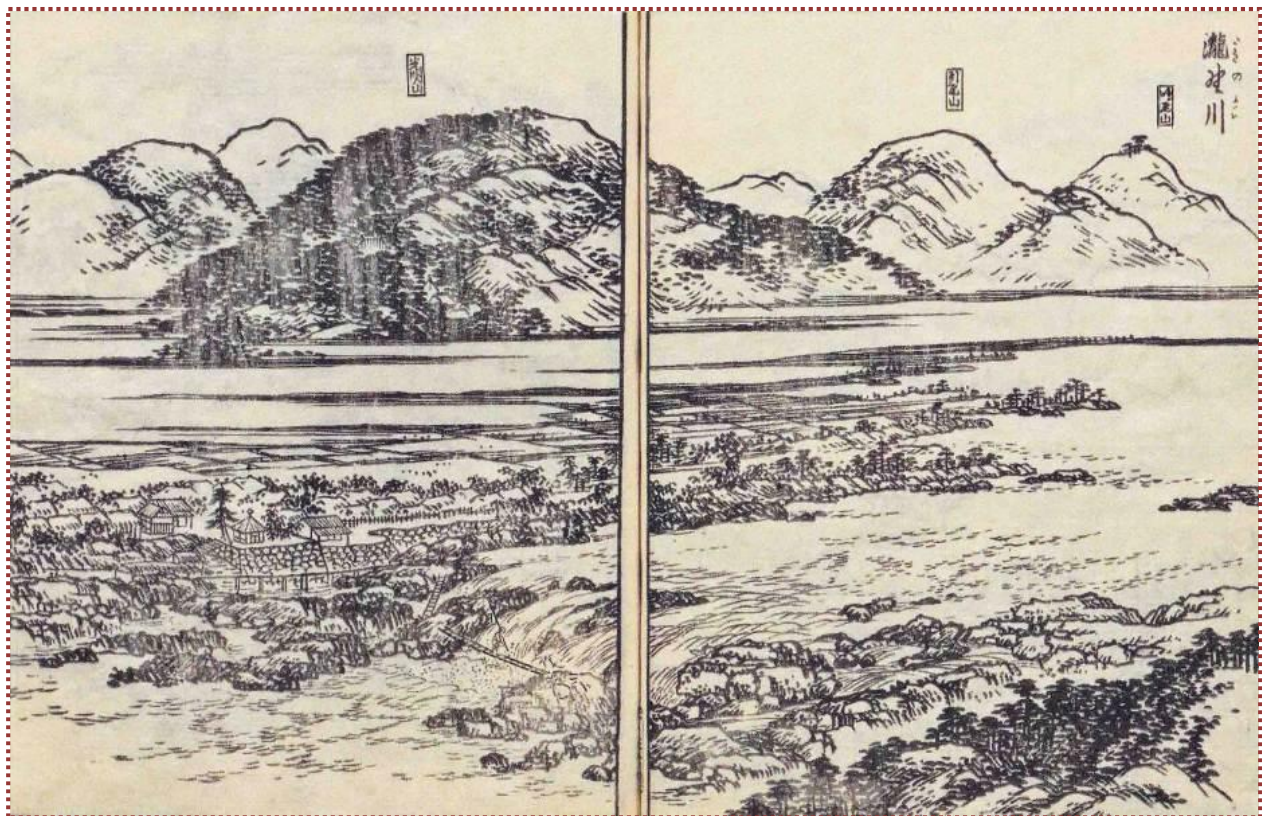


写真-4 『播州名所巡覧図絵』(二)「滝野川」に描かれた闘龍灘

上の絵は、その『播州名所巡覧図絵』に描かれた闘龍灘です。左側の絵には、闘龍灘に2本の梯子(はしご)が描かれています。この梯子の実物が「加古川流域滝野歴史民俗資料館」に展示されているということで行ってきました。屋内展示と思っていたら屋外展示で、エントランスのコンクリート柱に立てかけてありました。錦雲橋の箇所に掛かっていた梯子だそうですが、平衡感覚が鈍っている筆者はとても渡れそうにありません。

梯子の説明板には、以下のように記されています。

闘龍灘の岩場にある錦雲橋(コンクリート橋)の前身として使用されていた掛梯子です。昭和30(1955)年頃に、上滝野漁業組合が、多可郡杉原谷の山林から良質な桧材を選び、原木のまま荷車で運び、滝野地域の大工に依頼して製作されたといいます。この梯子は、上滝野と多井田を結ぶ生活道路の役割を果たした最後の木製掛梯子です。

長さ：14.65m 幅：約1m(両端96cm、中央109cm) 重さ：約248kg



写真-5 掛梯子 (加古川流域滝野歴史民俗資料館にて)



写真-6 闘龍灘に架けられた錦雲橋

また、『播州名所巡覧図絵』解説の読み下し文がなかったので、筆者が挑戦してみました。解読できなかった箇所もありますが概ね以下のとおりです。

瀧野川 加古川の水上の滝野村にあり 川の東を新町といい西を滝野という 都会の地にして諸品交易多し 町の…に舟渡しあり 川中川岸に巖石多く流…激しく…流るるの瀑布のごとし 白波雲のごとく立ちて水声夥 (おびただ) し 筏は藤縄を解きて一木 (ひとき) を流し下流にて又筏と成す 弥生の頃より年魚 (あゆ) 多くのぼり急流に打たれて岩上に散り飛び事吉野の落花に似たり 漁者筧をとるに暫時数万を得ん 春日遠近の…客に…に聚 (あつま) りて美歌遊宴乃……。

■ 飛び鮎の名所・闘龍灘

闘龍灘は、舟運にとって大きな障害でしたが、河口から遡上してくる鮎にとっても障害となっていました。

江戸時代、闘龍灘の地形や鮎の習性をうまく利用した「筧 (かけい) 漁」(汲鮎漁ともいう) という独特の漁法が考案され、今に継承されています。これは、写真-7 のような筧 (木樋) に水を流して人口の滝をつくり、流れに飛びついて遡上しようとする鮎を仕掛けの穴に落とし込む漁法です。

『播州名所巡覧図絵』に、「急流に打たれて岩上に散り飛ぶこと吉野の落花に似たり」とあり、闘龍灘の「飛び鮎」は夏の風物詩としても有名だったそうです。近世では、領主の貢租対象でもあったとか。

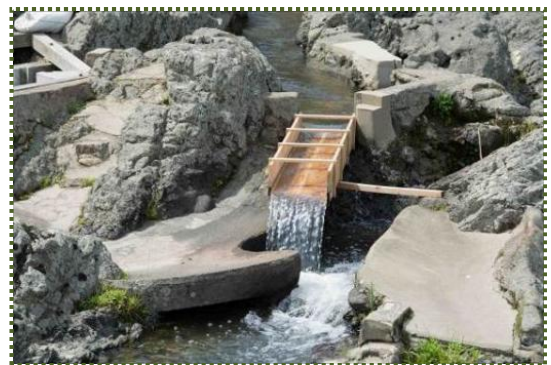


写真-7 筧漁

現在、加古川では5月1日に鮎漁が解禁され、闘龍灘の「筧漁」も始まります。闘龍灘に架かる錦雲橋からは揖保川産の稚鮎が放流されます。また、戦前までは川面に納涼屋形船 (写真-8) を繰り出して賑わったそうです。屋形船の背後に写っているのは旧滝見橋、右手の岩場が新町河岸跡です。

また、闘龍灘の右岸側にある料理旅館「滝寺荘」は名物の鮎料理が有名ですが、その「滝寺荘」の玄関脇、滝を見下ろす場所に「鮎塚」があります。旅館の先々代が、昭和30年代に鮎を供養するために建てたものだそうです。



写真-8 納涼屋形船 (『世界に一つ! 加東遺産』から引用)

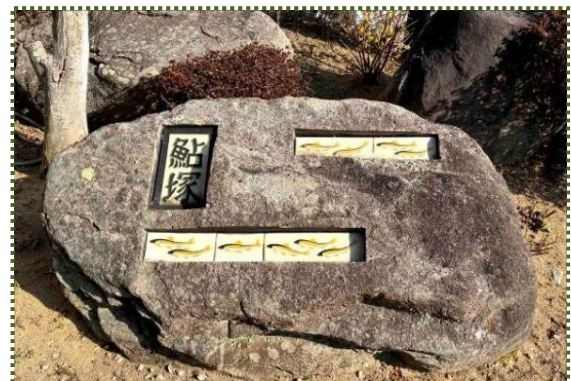


写真-9 「滝寺荘」玄関横の「鮎塚」

■ 播州寐覺の句碑

阿江与助像の近くに句碑（写真-11）があります。大正 5（1916）年 5 月 28 日、河東碧梧桐※4（かわひがいきこう）が播磨地方の俳友達から閭龍灘に招かれた際、加古川の清流にひとときの旅情を詠んだ句が、特徴的な六朝風書体で刻まれています。

ねざめ
播州寐覺 跳びあえず 渦巻く鮎のひねもすなる哉

上の句は、その日の閭龍灘に立った碧梧桐の目には、盛んに銀鱗を躍らせる若鮎の姿は見られなかったようですが、それはそれとして灘の渦巻く滝壺にひねもす潜む鮎の睦みあう姿を感じて、見えぬ詩情の伏線を歌い上げたものだと思います。

※4 河東碧梧桐：俳人・随筆家。伊予・松山藩士の五男として生まれる。名は秉五郎（へいごろう）。正岡子規に師事し、高浜虚子と並んで子規門の双璧と称される。子規没後は新傾向運動を展開し、ヒューマニズム色のある個性的な自由律を生み出した。昭和 12（1937）年没、享年 65。



写真-10 河東碧梧桐
（Wikipedia から引用）

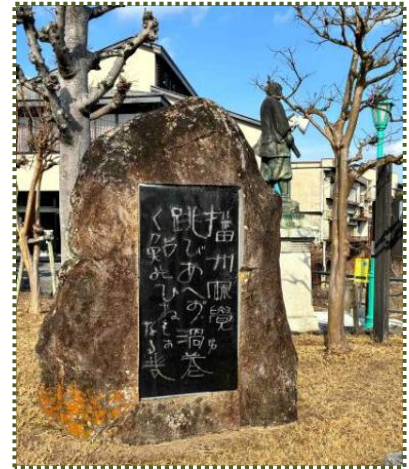


写真-11 「播州寐覺」句碑

播州寐覺
跳びあえず渦巻く鮎のひねもすなる哉
大正五年五月二十八日、河東碧梧桐が閭龍灘を訪れたときの句である。六朝風書体で大幅にしたためた句を閭龍灘の海岸壁に彫り刻む計画であったが中断となり、今日まで「滝野幻の句碑」として語り継がれてきた。播州における旅情の注目すべき一句として評されている。
以下、プロフィール略。

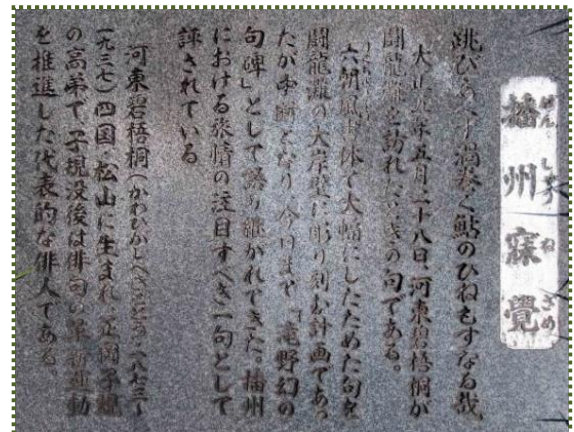


写真-12 「播州寐覺」句の解説

■ 地形・地質・自然景観の分野で貴重な「閭龍灘」

『兵庫の貴重な自然・兵庫県版レッドリスト 2011（地形・地質・自然景観・生態系）』によると、閭龍灘は、地形の分野では急流に形成された河床の甌穴群が、また地質の分野では生野層群（または相生層群）下部層中の岩脈および断層・河食がいずれもランクBに指定、加えて自然景観の分野でもランクCに指定されています。

写真-6 および 14 の中央に写る橋が錦雲橋で、この橋の上流側がデイサイト（石英安山岩）の岩脈、下流側が白亜紀・有馬層群鴨川層の流紋岩質凝灰岩だそうです。デイサイトは、凝灰岩の割れ目に沿ってマグマが貫入し固まったものです。緑っぽい灰色をしていて、細粒緻密で硬いそうです。

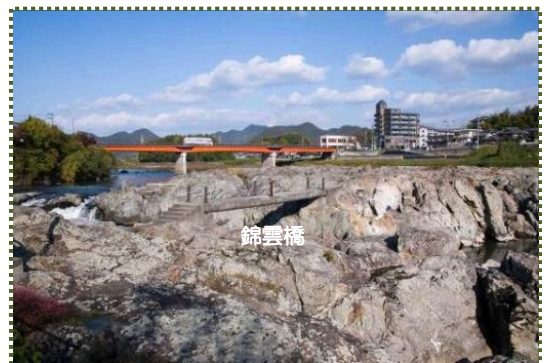


写真-14 錦雲橋の右岸側から対岸を撮影

※ 甌穴：ポットホールともいう。河床の岩石に割れ目や節理があると、その弱い部分が早く削れてくぼみができる。このくぼみに小石などが入り込むと、渦流のため小石がくぼみの中をころがって、円形の穴に拡大する。これが、甌穴である。

■ モノローグ

かつて舟運の障害となっていた閼龍灘、そして鮎にとっても遡上の難所となっていた閼龍灘。多くの文人が訪れた名勝「閼龍灘」。しかし、錦雲橋が架けられるまでは、掛梯子を渡って対岸に行っていたようです。筆者からみるとほとんど命がけのように思えてなりません。幅（側板と側板の間）は約 1m あるので、その間に板を張ればかなり歩きやすいと思いますが…。

【参考文献】

- 1 『国立公文書館デジタルアーカイブ～播州名所巡覧図絵（二）』 秦（村上）石田編 中井藍江画 文化元年
<https://www.digital.archives.go.jp/img/4400549#1>
- 2 『【世界に一つ！加東遺産】閼竜灘と鮎漁』 かとうトリビュン 令和 6 年 5 月
<https://kato-tribune.com/2024-05-katoisan/>
- 3 『ふるさと加東の歴史再発見～閼龍灘を望む滝寺荘の玄関脇に鮎塚』 令和 4 年 10 月
<https://furusato-kato.hatenadiary.jp/entry/2022/10/07/050432>
- 4 『兵庫県版レッドデータブック 2011（地形・地質・自然環境・生態系）』 財団法人ひょうご環境創造協会
- 5 『閼龍灘～加古川の川面に荒々しく広がるデイスイトと凝灰岩』 「地質岩石を訪ねて」HP
<https://www2u.biglobe.ne.jp/~HASSHI/toryunada.htm>
- 6 『閼龍灘、河東碧梧桐』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：平成 23（2011）年 8 月 『ひょうご水百景』 No.3

改訂：令和 8（2026）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.3-1